

## 巻頭写真 石川県真脇遺跡で検出された縄文晩期の環状木柱列

## Wood circle of the latest Jomon Period excavated at the Mawaki site, Ishikawa Prefecture

真脇遺跡は石川県鳳至郡能都町に所在し、縄文時代の代表的な遺跡のひとつである。能登半島先端の富山湾に面した小さな入り江の奥に存在し、立地する狭小な沖積地は北・東・西の三方を山にかこまれ、標高は6～12 mである。真脇遺跡の発掘調査は、圃場整備事業にかかる事前調査として1982（昭和57）年に第1次調査が実施され、1983（昭和58）年には第2次調査がおこなわれた。この2年間の調査は用水路部分に限定されたものであったが、北陸地方の縄文土器型式編年における前期初頭（ca. 5200 cal BC）から晩期終末（ca. 500 cal BC）までのすべての土器型式が層位的に確認され、能登半島の拠点的な大集落遺跡であったことが判明した。約4700年間にわたって縄文人が連続して居住しつづけたものか、断続的ながら居住しつづけたものか、AMS炭素14年代測定や暦年代較正など今後の研究の進展をまたなければならぬが、全国でも例をみない長期間にわたる定住集落である。このような調査成果により、1989（平成元）年には遺跡の約37,600 m<sup>2</sup>が国指定史跡となり、1991（平成3）年には219点の出土品が重要文化財の指定をうけた。その後、能都町では真脇遺跡を史跡公園として整備する計画が策定されたが、従来の発掘調査の成果だけでは遺跡の全体像が十分把握できなかった。そのため、1998（平成10）年から発掘調査（第3次）が再開され、2004（平成16）年の第9次調



写真1（上）環状木柱列A環（2003年の第8次調査，西より）。（石川県能都町教育委員会提供）

写真2（下）環状木柱列A環（1983年の第2次調査，西より）。（石川県能都町教育委員会提供）

査まで続行され、整備内容の検討がおこなわれている。

ここで紹介する環状木柱列は円形木柱列ともよばれ、直径5.5～7.5 mの円の上に8～10本の半割された柱をほぼ等間隔にならべた施設で、出入口口と考えられる門扉も付設されている。その特徴をいくつか指摘すると、第一はクリ材が使用されていることである。第二は半分に割られた木柱が使用されていることで、円弧面は内側をむき、割断面は外側にむいている。第三は木柱の大きさで、その幅（弦の長さ）が1 mちかくにもおよぶ大型のものや40 cmぐらいの小型のものもあり、遺跡や遺構によって異なっている。第四は木柱列の平面プランは円形を呈すると同時に、線対称に配置されていることである。この環状木柱列の木柱根は、北陸地方の縄文晩期中屋式期（ca. 1200–800 cal BC）の低湿地遺跡で散見され、残存しているのは地下の部分だけで、たてられた木柱の高さや地上の構造は不明である。そのため、環状木柱列は屋根や壁のある建物で、集会所や住居であったと考える研究者もいれば、木柱だけがたっている聖なる空間や記念碑と考える研究者もあり、機能や用途はよくわかっていないというのが現状である。ただ、クリの木の伐採から建造まで膨大な労力がかけられており、縄文人にとっては非日常的で、重要な建造物であったことだけは確かであろう。

真脇遺跡では、1983年の第2次調査では環状木柱列が3基確認され、A環・B環・C環と呼称されており、3基のなかではA環が最大の規模である（写真2）。しかしながら、第2次調査で検出されたのは環状木柱列の西半分のみで、その全貌は不明のままであった。そこで、2002（平成14）年の第7次調査と2003（平成15）年の第8次調査では、木柱列の全体像を究明するために、その東側の調査がおこなわれた。その結果、A環の3本の木柱根と門扉の木柱根が検出され（写真1）、A環の全体像があきらかにされた。A環は直径7.5 mの円形プラン上に10本の半割柱が配置され（写真1, 2）、木柱の間隔は約2.2 mである。いずれもクリの大木を割ったものを使用しており、その断面は弓形や半円形を呈している。木柱の幅（弦の長さ）は73～98 cm、平均は85 cmであることから、直径1 m前後のクリの木が半割されたことが推測される。縄文晩期中屋式期の所産で、木柱根2本の炭素14年代測定の結果から、較正年代ではca. 800 cal BCの年代観があたえられる。柱穴の検出面や所属時期から、その掘り方の深さは推定で約1 mと考えられている。A環とともに、B環やC環の実体も解明され、あらたな木柱列の存在もあきらかにされた。こうした調査知見から、環状木柱列はおなじ位置でたてかえが数回おこなわれたことが判明し、たてかえにあたっては、古い柱はひきぬかず、地中部分をのこして、きりたおされたものと推測されている。

以上のように、環状木柱列に関しては、出土状態など考古学的な事実は明確になっているものの、その機能・用途や性格は不明のままである。縄文時代における人と植物の相互関係を解明するうえで、環状木柱列は重要な資料であり、貴重な情報を提供してくれている。調査・研究を深めて未解明の問題を究明していくことが、今後の課題である。

（山本直人 Naoto Yamamoto, 高田秀樹 Hideki Takada）



写真3 A環木柱1検出状況（写真1の左から1番目、北より）。クリの木柱根は、幅約96 cm、厚さ約33 cm、残存している高さ約65 cmである。検出された標高は4.463 mである。（石川県能都町教育委員会提供）



写真4 A環木柱3検出状況（写真1の左から3番目、北より）。掘り方の中には、拳大から人の頭ぐらいの大きさの石が入れられており、礎板も使われている。クリの木柱根は、幅約76 cm、厚さ約27 cm、残存している高さ約55 cmである。検出された標高は4.307 mである。（石川県能都町教育委員会提供）